

アルノルト・シェーンベルク（1874-1951）とその弟子、アントン・ウェーベルン（1883-1945）、アルバン・ベルク（1885-1935）の三人は「新ウィーン楽派」と呼ばれ、20世紀の音楽の発展を決定づける一大潮流を創り出した。

シェーンベルクは1918年に「ウィーン私的演奏協会」を組織。弟子の2人とともに様々な同時代作品を演奏したが、1921年に協会の財政のため、大衆から人気の高かった同郷のJ.シュトラウス2世（1825-99）のワルツを編曲・披露した。弦楽とピアノなどに適宜いくつかの管楽器を加えただけの小編成だが、原曲の艶麗さを犠牲にせぬまま、透明かつシャープな響きが付与されている。

「南国のバラ」は序奏と4つのワルツによる豊かな香りをもつ名曲。オペレッタ《女王のレースのハンカチーフ》をもとに書かれたが、実際は他のオペレッタからお気に入りのメロディを集めたものとなった。

「宝のワルツ」はオペレッタ《ジプシー男爵》のメロディを使った、ワクワクするようなワルツ。

「酒、女、歌」はウィーン男声合唱協会のために「酒と女と歌を愛さない者は生涯愚者とどまる」といったテーマで作曲。この3つの要素にワルツが振り分けられ、バラエティに富む。

「皇帝円舞曲」は、J.シュトラウス2世の3大ワルツの一つ。当初は時のドイツ皇帝とオーストリア皇帝の関係を表す「手に手をとって」というタイトルであったが、のちに今の名となった。まさにワルツの“皇帝”と呼ぶにふさわしい優雅で華麗な1曲。

新ウィーン楽派にも強い影響を与えたグスタフ・マーラー（1860-1911）の《さすらう若人の歌》は、自身の失恋体験をもとに歌詞も自ら書いた連作歌曲集。「交響曲第1番」と同時期に書かれたため、直接・間接的に共通の素材（旋律）が用いられている。第1曲「恋人の婚礼の時」では、若人が失恋の嘆きを吐露し、続く第2曲「朝の野を歩けば」には、第1交響曲・第1楽章のテーマがそのまま使われている。スケルツォ的な第3曲「僕の胸の中には燃える剣が」では、若人が「O weh！（ああ、辛い！）」と何度も叫ぶ。終曲「恋人の青い目」のラストでも再び第1交響曲の今度は第3楽章・中間部が現れ、「道には1本の菩提樹が」と安らかに歌われる。

シェーンベルクはその初期、後期ロマン派の影響を受けた大編成オーケストラによる爛熟の音楽を多く書いた。そうした《ペレアスとメリザンド》や《グレの歌》を手掛けていた1906年、ごく小編成（15人）のために「室内交響曲第1番」を作曲。まだ無調ではないが、冒頭から従来の3和音を3度ではなく、4度音程で重ねるなど斬新な試みがなされ、その後の飛躍を予感させる。構成的には単一楽章の中に多楽章が組み込まれているが、弟子ウェーベルンの編曲により、いっそうシャープさが引き出されている。

オーストリアの大作曲家、アントン・ブルックナー（1824-96）の交響曲は、野趣あふれるリズムなスケルツォ楽章を含む。特に「交響曲第7番」の第3楽章（スケルツォ）は、先行する2つの楽章が優美で深遠なぶん、よりゴツゴツした感触や野生的な生命の横溢を感じさせる。